



JAFCOF 釧路研究会  
リサーチ・ペーパー vol.13

## ふたつの故郷の喪失：

### 樺太からの引揚げと尺別炭砒閉山

—岩崎守男氏による講演の記録—

編集：

笠原 良太 早稲田大学大学院文学研究科

[kasahara\\_2369\\_bz@ruri.waseda.jp](mailto:kasahara_2369_bz@ruri.waseda.jp)

嶋崎 尚子 早稲田大学文学学術院

[nshim@waseda.jp](mailto:nshim@waseda.jp)

2018年4月20日



目次

はじめに（嶋崎尚子）	1
南樺太全図	3
<b>岩崎守男氏講演「ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭砒閉山」</b>	
1. 第一の故郷「樺太」	4
はじめに：北海道における炭鉱のはじまりと捕鯨の関係	
出生地、樺太について	
樺太からの引揚げ：「密航」	
2. 第二の故郷「炭鉱」	9
炭鉱での生活	
炭鉱生活の特徴①：「ゆりかごから墓場まで」	
炭鉱生活の特徴②：隣近所との付き合い	
友子制度	
3. 社会の歪みと社会学の課題	14
閉山後、労働者たちの困難	
産業の再編成と家庭崩壊、子どもたちの非行化	
おわりに：「ふたつの故郷の喪失」と社会学への期待	
質疑応答	18
当日配布レジュメ	21
参加学生の感想	24
解題（笠原良太）	29

## はじめに

本釧路リサーチ・ペーパーVol.13 は、岩崎守男氏による講演の記録です。この講演は、2017年9月18日に早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミ「“生きている炭鉱”と釧路研究」フィールドワークの一環として、学部3年生、4年生を対象に、釧路市立博物館講堂で行われました。岩崎氏には2014年からの尺別炭鉱研究へのご協力を機に、今回講演いただく機会を得ました。岩崎氏は、社会構造の歪み（階層など）への注視に基点をすえ、大きな社会的・歴史的出来事の衝撃がもっとも弱い人たちに集中することを実体験として理解し、社会運動・労働運動を展開しておられます。今回の講演で紹介された岩崎氏の樺太と尺別という「ふたつの故郷喪失」というご体験は、私たちにこうした視角の有用性を十分に理解させるものでした。

巻末の解題でも触れられているとおり、本講演をとおしてゼミ学生たちは、樺太での石炭産業、戦後の引き揚げ過程と炭鉱への移住、炭鉱社会での友子などの共済ネットワーク、そして釧路における捕鯨の重要性といった新たな研究テーマを得ました。さっそく、2017年度ゼミ報告書『“生きている炭鉱”と釧路研究Ⅴ』では、捕鯨に関するレポート2本、友子に関するレポート1本を所収しています。本書と合わせてご覧いただければと思います。また、本講演録の作成過程で岩崎氏から、労働組合運動はあくまでも労働者の生活向上を目指すものであり、それゆえ三池闘争等の結果を勝ち負けで捉えること自体を再考すべきとの重要な指摘をいただきました。

本書には、当日の講演内容のほかに、質疑内容、配布資料、参加学生の感想、解題を合わせて所収しています。岩崎守男氏には、ご多忙のなかご講演いただきましたことに深く感謝申し上げます。さらに、講演録刊行のご快諾ならびに丁寧なご校正をいただきました。ありがとうございました。

2018年3月15日

早稲田大学文学学術院教授

嶋崎尚子



### 岩崎守男氏 プロフィール

昭和12（1937）年、樺太生まれ。敗戦後に引き揚げ、雄別炭鉱・尺別炭鉱で少年期・青年期を過ごす。昭和33（1958）年に釧路工業高校卒業後、釧路市役所へ入庁。自治労道本部役員、釧路地区本部委員長を経て、昭和50（1975）年より北海道議会議員（5期20年、釧路市選出、日本社会党）を勤める。現在、一般社団法人全国樺太連盟資料管理委員長、社会福祉法人釧路若草会理事長、行政書士釧路支部顧問。

## 付記

- 本書では、一般名詞の場合には「炭鉍」を、固有名詞の場合には原表記に従って「炭鉍」と「炭砒」を用いています。
- 本書掲載の写真うち提供元の指示がない分は、岩崎守男氏から提供を受けました。
- 本書掲載の講演内容は、事前インタビュー（2016年9月実施）と事後インタビュー（2018年3月19日）をもとに一部補足しました。
- 本編の編集は、笠原良太（早稲田大学大学院文学研究科）が担当しました。
- 本講演の開催にあたっては釧路市立博物館にご協力いただきました。感謝いたします。



## 「ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭砒閉山」

お話：岩崎守男氏（元北海道議会議員、全国樺太連盟資料管理委員長）

2017（平成 29）年 9 月 18 日

### 1. 第一の故郷「樺太」

はじめに：北海道における炭鉱のはじまりと捕鯨の関係

私は今年でちょうど 80 歳になりました。今、嶋崎先生から紹介ありましたが、私は「釧路若草会」という保育園の理事長をやっております。そこでは 5 歳くらいの子どもと話をしますが、みなさんのような青年淑女と話す機会はなかなかありません。私は青年運動もやったことがありますが、もうかれこれ 60 年も経ちま



写真 1 講演のようす（石川孝織氏撮影）

すが、もうかれこれ 60 年も経ちます。今日は先生に頼まれてまして、講演を引き受けました。私は石炭自体については詳しくわかりませんが、炭鉱で生活した経験がありますので、炭住生活についてお話ししたいと思います。

まず、みなさん、釧路に来られて何を食べましたか。釧路では今、大変美味しいものがあります。サンマやイワシです。サンマは焼くのがおいしいですが、イワシはお湯でゆでるのがおいしいです。それを、少し油を抜いて、大根おろしを用意して油を飛ばしたくらいがちょうどいいです。もう一つは、クジラです。今、クジラの試験操業をやっていて、

今年は 77 頭獲ることができます。捕獲した物は、釧路と網走に揚がります。そのクジラは冷凍していないので本当においしいです。ぜひ帰る前に召し上がってください。

釧路のクジラは、石炭と大きな関係があります。北海道の石炭発祥の地は釧路です。みなさんにお配りした資料（『釧路炭田』と『釧路捕鯨史』）にも書いてありますが、釧路と白糠の海に面したところで石炭が露出していて、そこで採掘した石炭を函館に運んで捕鯨船に供給していました。日本の開国とクジラは大きな関わりを持っています。釧路の近海は、暖流と寒流がぶつかり、プランクトンや餌があって、クジラが寄ってきました。クジラを追ってアメリカ、ニュージーランド、オーストラリアの船が来て、水と燃料の石炭を求めて日本に開国をせまったとされています。函館から一番近い港が釧路だったので、「ぜひ石炭を積みたい」ということで、釧路の前浜にあった石炭を函館まで船で輸送して、捕鯨船に供給したとされています。その後、わざわざ釧路でなくても函館から近い北の方にある茅沼で採炭をし、その後、三笠、空知炭田へと開発が進み、供給することになりました。

そういうことで、北海道における炭鉱の始まりは、釧路の前浜の露頭炭で白糠の石炭岬です。今でもその痕跡が残っていて、石炭岬に登ってみると、メタンガスが出ています。機会があったら行ってみたらよいと思います。

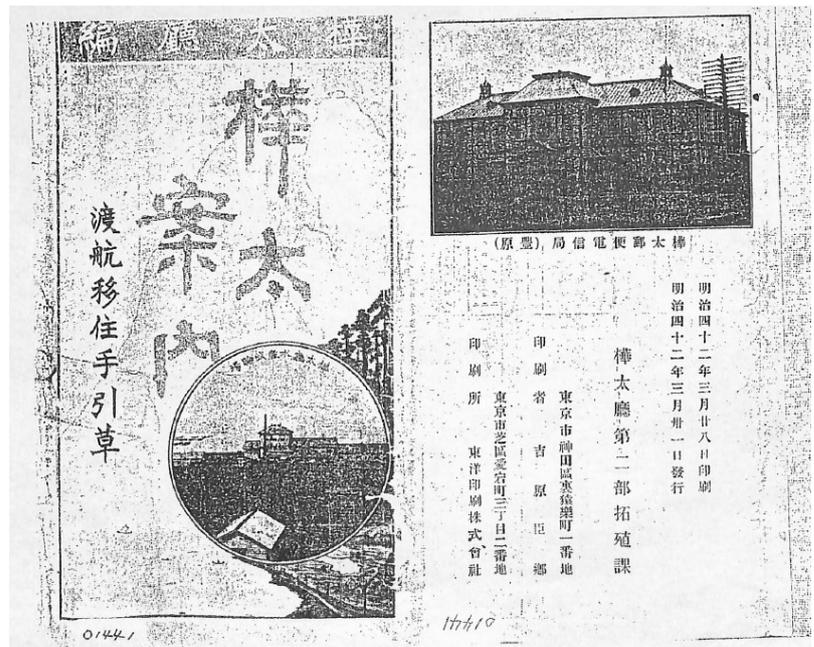
## 出生地、樺太

今日はレジュメに従ってお話をしたいと思います（P22-24 参照）。私は、自分自身の経験から、「炭鉱の閉山」と「戦争の終わり、敗戦」は、同義語ではないかと感じています。私の生まれは樺太の<sup>どろがわ</sup>泥川で、1937（昭和 12）年 8 月 15 日生まれです。8 月 15 日は、戦争が終わった日です。すなわち、私は終戦時に 8 歳でした。樺太のお寺の子として生まれました。

まず、樺太がどのようにして日本領になったかをお話します。かつて日本人が魚を追っ

樺太にわたっていました。一方、樺太では少数民族のロシア人たちが漁をして生活していました。日本も間宮林蔵が、ユーラシア大陸とサハリンの間に海があるのを発見し、「間宮海峡」と名付けました。日本人は「間宮海峡」と呼んでいますが世界的にはそうは呼ばれていません。「日本海」も世界的には「東の海」と呼ばれています。

樺太を日本の領地にしたのは、日露戦争で日本が勝利したときで、南半分を日本の領地、北半分をロシアの領地と線引きしました（P3、地図）。お渡しした『樺太連盟 40 年史』という資料に記載されております。日本人が樺太について話すとき、戦争に負けて逃げてきた経験をよく話しますが、どうやって行っ



資料 1 樺太案内 渡航移住手引草（講演時配布資料）

たのかについて話す人は少ないです。資料もほとんどありません。しかし、みなさんに配った資料（「樺太案内 渡航移住手引草」、資料 1）が参考になります。これは大変貴重で、ほとんどの人が目にしていないものです。これは、日本政府が発行したものです。樺太に、農林水産業などの第一次産業、石炭産業、そして、同時に学校の先生やお医者さん、お坊さんといった仕事があると書かれてあり、給料がいくらと書かれてあります。この中身は印刷していませんが、本物は北海道庁赤レンガの 2 階に北海道樺太資料館という展示場に展示してあります。

樺太の面積はわりと広く、36,100 km<sup>2</sup>、関東 7 都県と山梨県を足した面積で、人口も 40 万人いました。釧路は現在 20 万人を切りましたが、倍くらいいたことになります。産業は農林水産業が中心で、炭鉱と王子製紙のパルプ工場がありました。敗戦とともに全てを

捨て、命からがら引揚げてきました。

### 樺太からの引揚げ：「密航」

北海道や本州に戻るといっても簡単ではありませんでした。ロシアが国境を越えてどんどん攻めてきました。航空路での引揚げはほとんどありませんでしたので、主に船で逃げました。樺太連盟でも引揚者の数を調べていますが、なかなか調べ切れていません。資料（『樺太連盟 40 年史』）のなかに引揚者数の推定が載っています。1946（昭和 21）年から 1949（昭和 24）年の間に 40 万人前後が樺太から本土に渡っていると書いてあります。

引揚げの方法は 3 つありました。「疎開」、「密航」、「引揚げ」です。「疎開」は、日本の政府が輸送船を用意して大泊から船で逃げたのですが、戦争が終わっているのに引揚げ船 3 船は留萌沖でロシアの潜水艦に沈没させられました。そのころロシアは、アメリカとの領土分配の話し合いで、北海道を留萌から白糠に線を書いて、北側をロシア、南は日本に戻すという主張をしていました。話はまとまらなかったのですが、たまたま話し合いをしているときに疎開の船が通過して、ロシアの潜水艦に沈没させられる悲劇があり、多くの人が亡くなっています。

私自身は「密航」で引揚げてきました。敗戦の時、私は小学 2 年生でした。敗戦から 1 週間もしないうちに「露助」が来て、村で空砲を打ったり、人の家に土足で入ったりしました。日本人にとっては屈辱です。女、子どもは裏山に逃げました。早いうちに日本に逃げなければならない。しかし、泥川から出港地の大泊までは遠く、途中で「露助」に見つかってしまいます。ですから、村の人たちだけで船を仕立てる必要がありました。船に乗り込むのは泥川から北にある芳内よしないというところでした。なぜ北海道に少しでも近い南ではなく北に行ったかという、南は砂地の海岸だったからです。砂地だと足跡がついてしまいうし、遠浅で相当沖に出ないと船に乗れないため、すぐに見つかってしまいます。したがって、岩場の海岸で、崖の下にある船場を目指しました。

(昭和 20 年) 9 月 20 日くらいでした。朝早く、食糧を背負わされて、2 里ほど(約 8 km) を歩きました。私の母親は若くして倒れていたもので、「置いて行ってくれ」と言っていました。親戚兄弟が母を馬車に乗せて、船着き場まで連れていきました。船に乗るのには、だいぶお金がかかりました。私たち子どもらの小遣いが 50 銭くらいだったときに、1 人当り 50 円くらい払い、さらにお米を渡さなければなりません。今でも兄弟が集まったときに、「どうやってお金を出したのだろうか」と話をします。

船には男は乗ったらだめで、女、子どもと年寄りだけが乗りました。したがって、上の兄は残され、すぐ上の兄(小学生)、姉たちと一緒に乗りました。船といっても旅客船ではなく、100 人ほどが乗れる小さな魚船でした。船の乗り降りなども女、子ども、年寄りだけでやらなければなりませんでしたが、周りの人たちが手伝ってくれました。立錐の余地もないので、兄と一緒に地下の魚を入れるところに入りましたが、暑くて、暑くて、入っていただけだったので、上げてもらって甲板の端に小さくなっていました。

すると、ちょうどロシアの監視が来たのが見えました。「さあ早く船を出せ」とみんなが言うけれど、焼玉エンジンだからすぐには出ません。私は、はらはらしていると、どこからか逃げてきた 3、4 人の日本の軍人風の人が、「この船に乗せてくれ」と言っていました。今まで軍人というのは神様みたいな人でしたが、「なんとか乗せてくれ。本州に戻れば私の家はこういう家だから、どんなことでもするから」と頼んでいました。その姿は、子どもながらに「上下関係の逆転」、「人間の本心」を見たという感じでした。その軍人たちはその後どうしたかという、磯舟に乗って、私たちが乗っていた小さな船に引いてもらっていました。地獄ですよ。宗谷海峡は、日本海とオホーツク海の境で波が荒く、夜中はロシアの監視船に見つからないように、電気もエンジンも止めるのですから。

船は潮に流されて北海道の枝幸<sup>えさし</sup>の方まで流されました。「荷物投げるか、人間投げるか」という声が聞こえてきました。当然、荷物を投げます。稚内に着いたときには布団一枚ありません。ようやく稚内に着いたのが、次の日の昼頃で、16 時間くらい船に乗っていました。

た。もちろん、稚内では「ご苦労さん」という歓迎もないし、行くところもない。現在、稚内支庁が立っているところは、当時、野原でしたが、そこにムシロ1枚くれて、家族がそれぞれたむろしました。

「本州とはどんなところか」と子ども心で本土に行けることを楽しみにしていましたが、いざ初めて日本の土を踏んで風景を眺めると、殺風景で寂しいものでした。それは、東日本大震災のときの映像のような風景でした。「北海道はもっと賑やかなところかな」と思っていたのですが、残念でした。「これが戦争の結末なのか」と思いました。戦争が始まって、どんどん食べるものがなくなって、そしたらおまけにこうです。もし、船で逃げているときに死んでいたら、国民の1人としてもカウントさえされていません。そういう悲劇があるので、どんなことがあっても戦争はいけません。

## 2. 第二の故郷「炭鉱」

### 炭鉱での生活

その後、親戚のある函館へ行きましたが、敗戦後の日本に坊主が勤めるお寺はありませんでした。そこで、すでに働いていた兄たちを頼って、雄別炭砒（旧阿寒町）に行きました。雄別には私が小学3年生から中学1年生までいましたが（写真2）、小学3年のときに母が亡くなり、中学1年のとき（1950年）に父が亡くなったので、姉が嫁いでいる尺別炭砒（旧音別町）に、まだ若い姉弟3人で移って、飯を食べさせてもらいました。あの時代は血縁のないきょうだいを狭い長屋に同居させる温かさがありました。私たちが寝られるように下屋を出してくれて、炭鉱会社も何も言いませんでした。

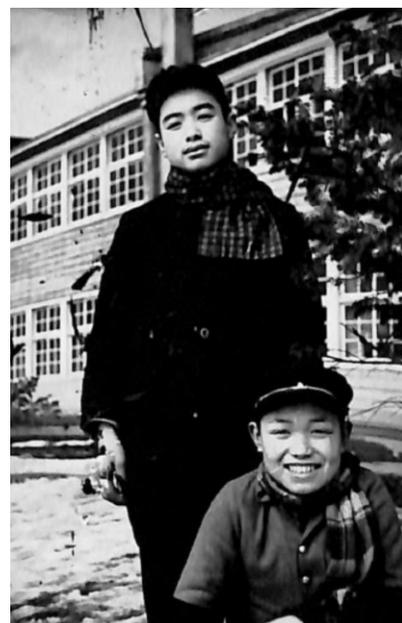


写真2 雄別中学校1年、友人高橋茂雄氏（後ろ）と

雄別と尺別は同じ炭鉱地区でしたが、雄別は人口1万人を超えて、街の規模は違いました。中学校も雄別では1学年5クラスぐらいありましたが、尺別では2クラスでした



写真3 尺別炭砒中学校6期生卒業写真（1953年3月）

出典：記念誌編集委員会編（2000：144）より転載

（写真3）。規模が違うから雰囲気やコミュニケーションが

違いました。尺別での生徒の交流、付き合い方は、非常に家族的でした。私は転校して途中から入ったけれども、先生に恵まれました。私は田中義一<sup>ぎいち</sup>先生のクラスでしたが、野球部の顧問だった市橋大明<sup>ひろあき</sup>先生にもよくしてもらいました。私が中学2年生のとき、市橋先生に国語を習っていたのですが、「弁論大会に出なさい」と言われました。学校での発表会では8番だったと思います。下位なのに大人も出場する全山大会に出してくれました。この大会で第2位になりました。これは大きな自信になりました。市橋先生とも話すのですが、私が政治家になるきっかけを先生に作ってもらったと話しています。

それから、高校時代は釧路市鳥取共栄にあった雄別寮（雄社学生寮）に入っていたのですが、高校3年生のとき栄養失調で肺結核患になって、尺別に戻って療養しました。そのとき、地域の人たちと家族はとても温かかったです。姉の姑さんもなかなか苦勞人で、温かい人で、姉が気兼ねして煮物を少なく盛ると、多く盛ってくれるとか、たったそんなことだけでも、80歳になった今日でもやっぱり心には残ります。今でも、芋とササギの煮物をみると、尺別を思い出します。そのようなことで、炭鉱にはいろいろな人たちが集まっていましたが、温かい人間関係が残っていました。

## 炭鉱生活の特徴①：「ゆりかごから墓場まで」

私は炭鉱で仕事をしたことはありませんが、このように長く育てていただきました。雄別炭砦、尺別炭砦、そして、議員になったあとは太平洋炭砦の方々にお世話になり、20年間議員生活を送りました。そのときに、炭鉱は非常に人間的な社会であると思いました。

炭鉱は「ゆりかごから墓場まで」と言われ、地方自治体の仕事を会社が全部面倒をみてくれる地域社会です。ふつうの地域では自治体が生活のほとんどの部分を面倒みますが、炭鉱の場合、住むところをはじめ生活面のほとんどを炭鉱が面倒みます。まず、住宅自体は長屋がありました。私が生活していたのは四軒長屋でしたが、もっと昔は棟割り長屋といって、八軒長屋でした。ハーモニカを思い浮かべればよいのですが、真ん中を仕切った長屋でした。その長屋には後で組夫が入っていました。

それから、水道、石炭、電気も会社がみていました。ある意味ではいいことでしたが、自分たちで努力して生活しようという人がほとんどいませんでした。会社まかせの生活になっていました。学校の先生も教員住宅ではなく、炭鉱の職員が入る住宅に住む先生が多かったです。独身の先生は、炭鉱クラブで生活する人もいました。もっといえば、先生の給料の一部は会社が面倒をみるということもありました。

生活全体を会社にみてもらって、経済的には大変よいことでしたが、逆にいうと、炭鉱の人たちは、まったく自立していませんでした。いざというときに、自分で生活できませんでした。電気も自分で払うなら、使用后、消灯するのがふつうですが、炭鉱での生活だとつけっぱなしです。電気料金も会社のお金だから消す必要がありません。会社は細かいことを言いませんでした。大人になってから知ったのですが、電気は産業用の電気だったので安かったのです。水道もタダ、石炭もタダでした。そうすると自立しない状態です。これが閉山になったあとに経済管理に大変苦勞することになります。

## 炭鉱生活の特徴②：隣近所との付き合い

炭鉱では、隣近所との仲が大変良かったです。隣の家が何をしているのかはすぐわかります。音は聞こえる、においは香ってくるという関係にありましたので、隣近所は家族同然みたいなものでした。長屋ならではの話でいえば、たとえば、円筒掃除です。みなさんに円筒といってもわからないかもしれませんが、石炭ストーブの煙突は曲がった円筒ではなく、まっすぐに立っているので、石炭をどんどん焚いて煙突が詰まったときに掃除しなくてはなりません。屋根に上がって、缶詰の缶の上に紐をつけて上から落とすと円筒掃除になりました。自分の家の円筒掃除をしたあとに隣の円筒掃除をしてやっても何も造作ないです。「やるよ」というとストーブをうんと燃やして、上から缶をざっと降ろしてやりまします。そうすると隣の家もその隣も、とやってやります。こういうことが家族同然の関係をづくり、大変絆が強くなっていきました。

春夏秋冬、こうした隣近所との付き合いをします。春には花見をして酒を飲み、夏には盆踊り。「月が出た出た 月が出た」とどこの炭鉱も盆踊りは盛んです。子どもから大人も輪になって踊りました。秋になると焚き付け割をします。今みたいにガスではないので、火をつける前に木を割っておいて焚き付けをします。それを長屋の玄関前に丸く吊るしておくか、塀にずらっと並べておきます。これが暖房の役割を果たすくらい並べます。そして、隣近所の人たちが、なかなか火が付かないというときは分けてあげます。12月になると正月用の餅をつきます。大体 29 日はつかないので、28 日か 30 日にやります。ついた餅を隣近所に配るのが当たり前です。

炭鉱が閉山になったあと、札幌や東京で「雄別会」や「尺別会」という集まりが続いています。閉山から 50 年近く経ってもなお続いているのは、今申し上げたようなつきあいの積み重ねが人間の輪や絆を強めたからではないかと思います。また、雄別炭砒・尺別炭砒の子弟寮が釧路にあったのですが、私自身もそこで生活をしました。そのときの仲間が「ブリッジ会」という会を作って、今でも酒を飲んで、集まれる関係にあります。これは

一朝一夕にできたのではなく、炭鉱に何かしらの文化があったからではないかと思います。

## 友子制度

そう思っていたときに、友子があることに気づきました。友子は炭鉱だけではなく、銅山や金山はもちろん、沖仲仕やマタギの人たちにもあったとされています。炭鉱の友子については、『釧路炭田』や『音別町史』のなかに書かれてあります。友子は太平洋炭砒の人たちの流れや雄別、庶路、尺別、それぞれに友子がありました。釧路だけでなく空知炭田にもありました。ある意味では親分子分の関係で、「三」という数字を大変大事にしていました。「一度仲良くしたら三代は続ける」という掟がありました。そして、その称号を持ってきたときには飯を食わせるという仁義がありました。親分子分舎弟というのが組まれて、約束事は仲間を大事にするという制度です。今の言葉で言えば共済制度です。友子は共済制度のはじまりだったと思います。

たとえば、坑内で働いて落盤で怪我をする、あるいは命を亡くすと、親分と子分がそれを面倒みます。そして、そのつながり全体がお金を出して、そして食べ物を出して生活を支えます。それが今の共済制度、保険制度につながっていったと見て間違いのないのではないかと思います。こういった友子制度が炭鉱生活のなかにあったので、絆は強くなっていたのではないのでしょうか。

その後、共済制度が制度化され、労働組合も法律で存在を認められて力を発揮するようになると、友子制度はほとんど形にならなくなりました。しかし、今でも友子制度のようになごりがみられます。釧路太平洋炭砒の下町にある「下町町内会」は、釧路市内で一番まとまりがある町内会だと思います。最近はやめたそうですが、ついこの前まで、元日の忙しいときに各町内会の会長が一つの場所に集まって顔をあわせ、酒を酌み交わすということをやっていました。私は、釧路市内の多くの町内会をみてきましたが、下町の連合町内会のような温かい集まりはほかに知りません。これは人間の絆を大切にしていた文化の

名残ではないかと感じています。雄別や尺別の集まりが東京や札幌で行われているのもこうした人間のつながりの尊さを象徴したものだと思います。

### 3. 社会の歪みと社会学への期待

#### 閉山後、労働者たちの困難

さきほどお話しましたように、炭鉱では会社が一人ひとりの生活をすべてみていたので、閉山になって町や都会に出ることは、荒波に放出される魚のようなものだったのではないかと思います。悪く言えば、「自立を促さなかった」ということですが、それは会社にとって必ずしもマイナスではありませんでした。つまり、町内会をつくらせることで、全体としてのまとまりが欠けるのではないかと考えたのです。どこの炭鉱を見ても、町内会はありませんでした。雄別は5区まで、尺別も3区までありましたが、町内会はありませんでした。つまり、自治が芽生えていなかったのです。これはある意味では会社が管理する上で得だったと思います。それから、生活面をみるなら、本来、役所の支所があるはずですが、ありませんでした。生活に関する相談がある場合は、ほとんど会社の労務課の出先である詰所に相談していました。会社直営の住宅ですから、住宅を直すのも、道路を直すのも、すべて会社なので、役場の支所はいらなかったです。詰所は、戦前では監視という側面が強かったでしょうが、戦後は監視というより生活相談になっていました。また、住むところも高いところに職員、一番低い日当たりの悪いところに鉱員が住むという階級社会でもありました。

しかし、面倒については本当によくみてくれました。したがって、閉山後、自分たちでは都会での生活の仕方がわかりませんでした。これは雄別、尺別だけではありません。空知炭田の例をみても同じでした。これが悲劇につながりました。炭鉱の収入は高く、初めから2万円くらい稼いでいました。私は炭鉱には入らず、高校を卒業してすぐに市役所に入りましたが、初任給は昭和40年代初めころで8千円でした。私は給与が2万円になっ

たら結婚しようと思うくらいでしたので、いかに炭鉱の給与が高かったかということです。しかも水道も電気も石炭もタダでしたから、大変な収入でした。しかし、町に来たらすべて払わなければならないので、閉山後の生活設計がなかなか立てることができなかったのではないのでしょうか。

### 産業の再編成と家庭崩壊、子どもたちの非行化

これが家庭崩壊にもつながったという例がたくさんありました。私は 1978（昭和 53）年に、「少年の非行問題」について道議会で質問を組み立てたことがありました。そのときに「産業の再編成と家庭破壊」ということで、離農と炭鉱閉山が青少年に与える影響はどうかということを探りました。すると、離農や閉山の 2 年か 3 年後にその実態が社会に表れていました。農業政策でいうと、減反によって離農しなければならなくなり、都会へ出る。閉山も同様に都会へ出る。そうすると家族の力関係が変わり、家庭崩壊になって非行少年が増えるというデータが、札幌市青少年問題研究所にありました。小学・中学・高校の一般家庭と欠損家庭、つまりどちらかの親がいなくなっている家庭の非行状態を調べた数字ですが、小学ではふつうの家庭では 11%、欠損家庭では 25%、中学ではふつうの家庭が 7%、欠損では 26%、高校ではあまり差がありませんが 15%の 19%と、欠損家庭で非行少年の割合が高くなっていました。つまり、離農、閉山によって都会に出てきた家庭で離婚が生じ、それにより子どもたちが非行に走るということです。離婚率も合わせて調べてみると、尺別のデータはありませんが、離農と閉山との関係で離婚率が上がり、そして青少年の非行につながったという結果でした。

このように、私は、資本主義社会において産業の再編成はやむを得ないと思いますが、できるだけ歪みを小さくすることが重要だと思います。たまたま尺別炭鉱の閉山は 1970（昭和 45）年で、高度成長期とちょうどぶつかって、この歪みが埋められたと思います。ある意味では被害の少ない状態でした。さらに言えば、労働組合がまだ力を持っていた時

代でした。炭鉱閉山に対して政治的にかなり手厚い処置がされているときでした。黒手帳はもちろん、炭鉱から出て行って住宅を求める場合は優先してもらえとか、学校も優先されるというもので、閉山にあった人たちを社会全体で支えていこうというものでした。尺別の閉山は高度成長期にぶつかったうえに、こういう政策もあったので、空知の閉山や離農よりは大きな歪みにならなかったと思います。

このように産業の再編成のときは、歪みが生じます。みなさんの学問はこうした歪みをどう埋めていくかを考える学問ではないでしょうか。

### おわりに：「ふたつの故郷の喪失」と社会学への期待

今、雄別炭砦と尺別炭砦に行ってみると、雄別は廃墟になっていて、尺別も何もありません。雄別は、ボイラーの煙突と病院が残っていますが、全部が自然に還ったようになっています。尺別は、きれいに処理した点はよいのですが、ほとんど何も残っていない状態です。樺太の泥川に 1999（平成 11）年に行ってきましたが（写真 4）、当時、国道が走っていた橋も朽ち果てていました。今は、樺太も雄別も尺別もなくなりました。まさに敗戦と同じ状態でした。雄別と尺別を見たとき、私は戦争と閉山は同じだと感じます。



写真 4 同郷者と泥川訪問  
（1999 年、前列左が岩崎氏）

私は「本当に故郷は必要なのか」と自分に問うてみました。故郷とは何かと問われると、山や川は残りますが、具体的にはありません。しかし、やはり故郷は必要、大切だと思います。しかし、「なんだろう」と問うと表現が難しいです。みなさんは何だと思いませんか。

昨日、若草保育園の運動会をやりました。天気がよくて大変よかったのですが、そのと

きに、「故郷はこれだな」と思いました。保育園に関わってすでに 40 年になるのですが、同じ保育園の運動会に親子三代そろって参加している家族がありました。この前までこんなに小さかった園児が、子どもを連れて参加しているのです。そういう家族の姿を見て、「これこそが故郷の原形かな」と思いました。

しかし、炭鉱や樺太の人びとは、そういった故郷の風景を眺めることができないと思うと、やはり寂しさを感じます。みなさんはまだそれほど大切だと感じないかもしれませんが、この年齢になるとそういう尊さと大切さを感じます。

みなさんが学んでいる社会学は、人間の幸せをどうつくっていくかを考える学問だと思います。みなさんは、夢をたくさん持って勉強していると思いますが、なんのために勉強しているかと考えたことがありますか。何のために学校に行くのだろうか。それは、幸せを追求するために学校に行くのではないのでしょうか。そうすると、幸せは生産点にあるのではなく、生活点にあると思います。生活点は地域社会や家庭にあります。そのときにみなさんが学んでいる社会学が大変重要で、価値のある、尊厳のある学問だと思います。私は孫まで連れて卒園した運動会に来るといったことが幸せだと感じます。みなさんには、社会学を学ぶことを通して、そうした社会を構成し、守っていくために努力していただければいいなと思います。

長くなりましたが、もう一度繰り返せば、戦争と閉山は同じような意味合いを持っていました。戦争は命の危険までありましたが、閉山は命の危険こそないけれども、人間にとって歪みを経験するものであるのです。そのようなことがないように、みなさんに頑張ってほしいと思います。ありがとうございました。

—拍手—

## 質疑応答

嶋崎：大変内容の豊富なお話をいただきました。そして、社会学への期待をいただきまして、「ずしり」ときました。おそらく、最後に仰っていた産業の再編成について、どのような歪みが生じるのかは、想像力、イマジネーションが必要です。それを学ぶのがこのゼミの活動です。その一つとして今日は樺太の話や閉山の話もありました。おそらくそれだけではなく、今、同時期で私たちが生きている社会で、全く気付いていない歪みの問題、たとえば東日本大震災のあと原発事故によって散り散りになった人たち、あの人たちの部分でも大きな歪みがあるでしょう。では、その人たちが頼れる絆があるかということ、樺太連盟もない、絆もない、今、本当に大変な人たちは、今日うかがった人たちよりももっと大変なことに直面しているのかもしれない。ではそういうときに私たちが何をしたらよいのかということはおそらく、先生たちがなさってきたこと、そして、釧路でしてきたことを援用することで、現代に合った形の一つの支援ができるのだと思います。今日のお話の中でその枠組みをいただくことができたのだと思います。

せっかくの機会ですので、ぜひここで積極的に質問をしてください。

学生：お話ありがとうございました。私の祖父は、樺太からの引揚げ者なので、今日は樺太の話を中心に興味深くうかがいました。そこで質問なのですが、樺太から引揚げて炭鉱に移り住むというのは、なにかきっかけがあったのでしょうか。大勢で移り住んだのでしょうか。それとも、親戚がいたからたまたま移り住んだのでしょうか。

岩崎：答えは2つあります。一つは、樺太は第一次産業と石炭産業が主な産業でしたから、引揚げて炭鉱に行くというのは、必然的だったと思います。もう一つは、引揚げてきたときの生活状況、つまり、衣食住を想像してもらおうとわかると思います。みんな家はありませんし、職業もありませんでした。食べる場所はどこにあったかということ、農家と炭鉱

です。なぜ炭鉱かというと、エネルギーの主力は石炭でしたから、特配がありました。だから食べることができました。それから、住宅も保障されました。こうした理由で炭鉱に行ったと思います。私は当時子どもだったので、自分の親やきょうだいが何を求めたかはわかりませんが、私の想像するのはこの2つです。

今日はあまり細かく触れなかったのですが、戦争が終わったあと、一番悲劇だったのは、やはり弱い人でした。特に子どもたちです。親が戦争で亡くなったり、親戚もてんでバラバラ。子どもたちは、食べていくためにどうしたかということ、土管のなかで生活をしたり、あるときには、やくざの手先になって泥棒をしたり、靴磨きなどをして稼いだお金はやくざにもっていかれて生活さえできずに死んでいく、そうした子どもたちがたくさんいました。「緑の丘の赤い屋根」という歌（『鐘の鳴る丘』）があるのですが、孤児院に入れる人たちはまだよいほうで、入れない人たちがたくさんいるような時代でした。これが戦争による悲劇、非行少年の誕生なのです。

そして、さきほどお話した産業の再編成によって、町に出てきたあとで家庭が崩壊し、子どもたちが非行少年になるという例、今はなんというのかわかりませんが、子どもが勉強したくないのに「勉強しろ」と親に言われて、親と子どもの考えの違いからくる非行と言われていますが、いずれにしても何か起きたときには弱い者、子どもが一番の被害を受けます。弱い者をどうフォローするか、これを社会学でやってほしいと思います。

**嶋崎**：当時の弱い者には、高齢者は含まれていましたか。

**岩崎**：今みたいに高齢者はほとんどいませんでした。今の日本は町に出たら老人ばかりですが、当時はほとんどみかけませんでした。私は昭和 53、4 年ころ北欧に行ったことがあるのですが、町に老人が座っている風景を見て「ああこんなにいるんだ」と思いました。しかし、タバコを飲みながら話している様子を見て「いいなあ」と思いました。

学生：お話の中で、人間のつながりの尊さという話がありましたが、そういう経験は仕事をするうえで活きましたか。仕事をするうえで、人とのつながりだったり、そういうところで炭鉱での生活が活かされたことはありましたか。

岩崎：直接的に炭鉱というよりも、まず、信頼がなければいい仕事はできません。第二次産業の場合は、物理的な連携もあるでしょうが、第三次産業では信頼が非常に大事ではないでしょうか。電話で話すときも信頼関係が重要です。「この人は信頼できるな」、「この人なら想像して理解をしていただけるのではないだろうか」ということを思えないと仕事はできないと思います。

炭鉱では、「どこの出身だ」と言うと信頼感があったり、あるいは酒を飲んで語り合った人たちとの関係はかなり大事にしました。そうすると仕事が上手くいくのです。意外とちょっとしたことでつまづくことがあります。私は人間を組織する仕事をいろいろやってきましたが、一つの経験をともにして、同じ目標にむかって仕事をやったことがある人、あるいは目標がわかる人とは、仕事が捗ります。同じ星を見つめて、ともに仕事をやったことのある人、この目標がお互いに共通の目標でないと仕事はうまくいきません。もっと言うと、政党は一つのポリシーや柱が一緒だから仕事ができるわけです。この柱を一緒にできるかどうかということが大事だと思います。だから、はじめに酒を飲み語り合うことが大事だと思います。

—拍手—



写真5 第85回道展出品作

「スカイロードからの展望」制作のようす  
(撮影時期：平成22年10月)

当日配付レジュメ

産炭地研究会 ——尺炭閉山記

2017年9月18日

A. 炭鉱閉山と敗戦は同義

1. 人には皆、故郷がある

私には故郷が3つあった  
樺太—雄別—尺別炭鉱  
(総て消えてしまった)

2. 戦争もエネルギー革命も国策である

いつの時代も弱者いじめに終わる

3. 民衆には知恵が豊富である

人と人の和は宝だ

## B. 炭住街のくらしに温もり

### 1. 五感で見る風景

- (色) 選炭の黒い川
- (音) 出勤時を知らせるサイレン  
朝、昼、晩（1～3番方）
- (におい) 石炭のにおい、長屋の暖房ストーブの煙
- (味) ナンゴ（馬の腸の味噌煮）
- (触感) 温もり 人と人の絆

### 2. 炭住の歳時記

- (春) 花見と山神祭
- (夏) 盛大な盆踊り
- (秋) 薪割り（焚付の軒下干し風景）
- (冬) 餅つき（隣近所に配る）

### 3. 区割り住居

- ①町内会（隣組）ない 1区～3区（住宅地域区分）  
職員、砧員、組夫（下請）
- ②長屋、水道、石炭は無料
- ③詰め所（住民の相談窓口）
- ④購買会（会計直営）
- ⑤衛生施設（給水所、便所、風呂は共同使用）
- ⑥娯楽施設 協和会館一映画、劇団
- ⑦その他 友子、県人会、宗教、無尽

### C. 生けすの魚、大海へ

1. 産業の再編成の歪は働く者へ押寄せる  
慣れない都会生活—収入減 家庭崩壊（離婚）—子供の非行
2. 高度経済成長の波に支えられた面がある
3. 炭労（総評）の力があつた時期  
黒い手帳（労働者を支える）

### D. まとめ

1. 政治、政策の先に人々の生活がある
2. 民衆の知恵 —友子、労働組合
3. 日本の開国 —くじらと石炭

—嶋崎尚子ゼミ—

## 参加学生の感想（順不同）

- 岩崎さんの講演の中で、岩崎さん自身、樺太・雄別炭鉱・尺別炭鉱という3つの故郷がすべて消えてしまったというお話が印象的だった。特に炭鉱社会は、隣近所とも助け合って仲が良く、人のつながりが非常に強いということで、その分、故郷を想う気持ちというものも、ひと際強くなるのだろうと思った。
- 岩崎氏からは、炭鉱の仕事についてことがない立場から見た炭鉱の存在や、釧路のお話を聞くことができ、新たな視点から炭鉱について学ぶことができました。特に、炭鉱社会の人間関係、人と人のつながりについて、他の産業にはないであろう強固な関係があったのだと改めて感じました。「ゆりかごから墓場まで」という言葉で表現されるように、炭鉱社会では会社がほとんどすべての面倒を見てくれたり、炭鉱に住む家庭同士で調味料を貸し借りしたりする深い関係性があると今までの学習で理解していましたが、実際に岩崎氏からお話を聞くことによってより理解が深まりました。
- あまり目を向けたことのなかった、釧路や道内の石炭産業の始まりのお話しから始まり、「閉山」の人生に与える影響の大きさ、社会学の意義や故郷に関する事など幅広いお話を聞かせていただくことができました。その中でいくつかの新たな観点をいただきました。産業としての炭鉱、敗戦と一種同意義な閉山、社会との壁があった炭鉱社会。とくに印象に残ったお話は、産業の再編成が大きなひずみを生んだというお話です。家庭崩壊や非行に走る若者が多くなったというのは興味深いお話しでした。比較的その当事者のかたのお話しや文献を読むことが多かったので、閉山を経験した親がいる、または夫がいるという方への関心が強く湧きました。また、産業の再編成という意味では会社や行政が担う個人の人生への影響力も改めて痛感しました。一つ心残りを挙げるとするならば、昔参加されていたという青年運動に関するお話しをお聞きしてみたかったです。
- 炭鉱はゆりかごから墓場までというほど、面倒をよくみていたために、樺太からひきあげてきた人たちが、衣食住を求めてやってくるのは、ごく当然のことという説明で、当時の状況を想像することができました。しかしそれゆえに閉山後など、炭鉱から自立して生活できない人が多い、という話はゼミで学んでいましたが、実際に家庭崩壊につながり、非行少年が増えるというデータははじめて見ました。「産業と非行」という岩崎さんの考察は、非常に興味深いと思いました。
- 岩崎さんから、太平洋とはまた別の炭鉱のお話を聞くことができた。かつての炭鉱は隣近所仲が良く、家族同然の暮らしをしていたこと、また住居や水道・電気・石炭は

すべて会社が面倒を見てくれていたため、閉山後街に出るのが大変だったということを知った。また、炭鉱以外にも、信頼が無ければいい仕事ができないというお話や、幸せを探求する学問として社会学に期待をいただき、気が引き締まった。

- ・ 岩崎さんの尺別炭鉱の話聞き、改めて太平洋炭礦と他炭鉱の違いを実感することができました。尺別炭鉱では閉山までの間、すべて会社が炭鉱町で暮らす人々の面倒をみており、非常に利便性の高い生活を送っていましたが、それにより、閉山によって自立を強いられる状況になったために、生活に苦勞したというお話が印象的でした。太平洋炭礦では相談所の廃止や持ち家制度により、ある程度人々は自立しており、尺別などの人々が感じた苦勞はなかったのではないかと考えました。
- ・ 「何か起きたときにひずみを受けるのは弱者」という言葉も記憶に残っている。しかし、一番心に残ったのは、「信頼がなければいい仕事はできない。」「同じ星を見つめ、同じ仕事を一緒にやったことがある人、やる人」とならば仕事は上手くいく。という言葉である。別にこれらは仕事に関することだけでなく、日常生活の小さなことにも当てはまることである。誰かとなにかに向かって頑張るためには、仲間あるいは理解者が必要であり信頼感が必要不可欠である。私はもうすぐ社会人になる。それもあつてか、これらのワードは私の心に深く突き刺さった。
- ・ 岩崎氏の話で特に面白いと思ったのは、炭鉱町での暮らしについてだった。長屋での生活は、プライバシーがほとんどなく、また生活用品の共用などにより、隣近所の人々は家族同然ということだった。そのこと自体は映画や今までの学習で「知って」はいたが、当事者の話を聞くことで質感を伴った。また、燃料や電気を全て会社が賄ってくれていた、というのは一見すると羨ましいことにも思えるが、つまりは全く自立ができていないということ、というのも、新しい視点だった。岩崎氏はその会社への生活の依存が閉山後の生活に響いてくる、と話していたが、持ち家制度によって炭鉱の人々が「釧路市民」になった際も、影響は出たと思う。
- ・ 炭鉱社会における「つながりの強さ」のお話が印象的でした。隣人と家族同然とまではいなくても、周囲の人たちとのつながりや絆のようなものは、今でも大切なことだと思いました。これから社会に出ていくにあたって、周囲の人間と良い関係を築いていける人間になりたいと思いました。また、社会学についてのお話もいただき、卒論へのモチベーションが少し高まりました。
- ・ 岩崎さんのお話のなかで、はじめて「友子」について知ったのですが、江戸時代の初中期からこのような自動的救済組織があったということが印象深かったです。とくに、

友子の役割のうちの「技術的伝授」の部分に興味がおきました。このような組織は、現代のあらゆるコミュニティの中でも、参考になる部分はおおいにあると感じ、社会学をとおして過去を勉強するということの重要性を感じました。また、時間の都合上、質問をすることができなかつたのですが、岩崎さんのレジユメの「区割り住居」の「その他」欄に、「宗教」と書いていたのが気になりました。今まで勉強してこなかったですが、炭住生活のなかで、どのような宗教が信仰されていて、宗教がどのように人々の心を支えていたのかという点にも興味を持ちました。今回の合宿中は、炭鉱での仕事についてお伺いすることが多かったのですが、今度は、実際に炭住での生活をしていた方に炭住生活の詳細をお伺いすることができればいいなと思いました。

- ・ 樺太からの引き上げで、炭鉱に入ったお話を聞いた。炭鉱は衣食住を賄ってくれることから、当時のゆく場所のない方々拠り所となっていたのか、と考えさせられた。釧路に訪問するまでのゼミでの勉強では、「炭鉱社会は閉鎖的である」というイメージが刷り込まれていた。たしかに、炭住での暮らしや相談所ですべての役所の手続きが済んだことを踏まえると閉鎖的ではあるのだが、炭鉱にゆかりのない方々が炭鉱にすがるように働きに来たエピソードを聞くと、違った意味で炭鉱の開放的な部分が垣間見えたように思う。炭鉱社会というのが会社がすべてを賄っていたため、閉山とともに一般社会に出ることを強いられた炭鉱マンとその家族を、岩崎さんが「大会に放流される魚」と表現していたことに、「私の知っている閉山」と「現実」に差があることを再認識した。「閉山にも予兆があり、炭鉱マンもそれを把握していただろう」、ということ、「閉山になって自分たちの生活の仕方がわからなくなる」ような出来事はさすがに起こらないだろうと推測していた。過去のヒアリング調査・資料などを読み返して、そのギャップを埋めたい。捕鯨と炭鉱の関わり、友子の文献等、岩崎さんのお話の中で興味深い資料の話が多く出ていた。是非一度目を通したいと思う。
- ・ 私たちのゼミは、閉山したその沈みを埋める、つまり人間の幸せを探求する原点の学問だというお言葉がとても心に響きました。私自身、炭鉱って何、まだあるの？から始まり、少しずつ学んでいくなかで、十分な理解ができないままこの合宿を迎えました。4泊5日の長い合宿の中で、ゼミでの学習が、何を目的としているのか、将来とのつながりやこれからどこへむかっていくのか、少し盲目的になっていたのも、この言葉が強い後押しになりました。現在もまた、テロや原発事故など日本だけでなく、世界もまた沈みを経験している今、それを原動力にまた営みを継続し、未来を紡ぐ糸口が隠されている、とても未来性をもった研究であるという自覚をもって、後期の授業に励みたいと思いました。
- ・ 岩崎さんの講演のなかで、一番印象に残ったのは「絆」をととても大切にしていらっ

しゃるということです。「友子」についてお話されている岩崎さんがとても印象に残っています。一度仲良くなったら三代はなかよくする、というのは今の現代社会が昔と比べて失ってしまったものかなと感じました。終戦も閉山も同じようなことで、いつも「弱いもの」にしわ寄せが行く、と話されていましたが、このことは私にとっては新たな視点でした。今まであまりその二つを掛け合わせて考えたことはありませんでしたが、今回の講演でまた違った見方をすることができました。また、この言葉を聞いて岩崎さんにとって「閉山」というのはやはりとても大きな出来事であったのだなと感じました。

- ・ 樺太から引き上げてきた人の話を聞いたことがほとんどなかったのもとてもおもしろかった。まずそんなに多くの日本人が国策によって樺太に移住していたことを知らなかった。第一次産業が栄え、かつ衣食住がそろっていた炭鉱に移住したのは必然だったと語っていたので、彼らの多くが炭鉱町に移ってきたのだと思うが、その人たちの家族や生活について興味をわいたので調べてみたい。また、友子制度にも興味を持った。農業改革や閉山など、産業の再編成が生んだ社会の「ひずみ」の話が、戦争や閉山を経験した岩崎氏によって語られると一層重く感じられた。おそらく岩崎氏自身も弱い立場という子どもとして、さまざまな辛い経験がおありなのだろうと想像できた。そしてそれが現在の保育園での仕事につながっていると考えると、子どもを大切にしたいという強い想いを感じとれた。
- ・ 印象に残ったのは、閉山は戦争と同じほどの沈みを与えたという言葉でした。戦争、閉山の両方を経験しているからこそその言葉だと思います。当事者だからこそわかる閉山の意味や重さが伝わるお話でした。また、私たちが学んでいる社会学についても人間の幸せをどうつくっていくかの原点の学問だと教えていただきました。正直、ここまでのスケールを考えたことがなかったため、新たな気づきとなりました。
- ・ 戦後食べ物が無い中で、食べ物がある・住む場所が保証されるから、炭鉱で働こう！という考え・発想は、当時多くの人を抱いたものではないかと思う。「ゆりかごから墓場まで」と言われていた通り、電気も税金もすべて会社が管理してくれるため自立心は確かに育たないが、そのかわり社宅で過ごすこと自体が絆が深まることに繋がっていた、ということがわかった。炭鉱で働く・住むうえで、絆というのは最も大事になってくるのだろう。しかし、隣の家が今なにをしているのかわかってしまうなど、情報が筒抜けなのはどうかなあとも感じる（笑）。アットホームではあるが、反対にその点を嫌がる人はいなかったのだろうか。そして、最後におっしゃっていた、戦争≒閉山というのが最も印象に残っている。戦争も炭鉱も、終わった後はどちらも弱いものにしわ寄せがいく。閉山後の人々の生活はどれほど苦労したのかはまだよくわからな

いが、誇りであったものを失い、相当気力を失ったことだろうと思われる。

- ・ 戦争と炭鉱の閉山を一緒に考えたことがなかったので、視野が広がった気がした。炭鉱について勉強する中で、意外と“なぜ石炭を掘る必要があったのか”ということに触れていなかったもので、捕鯨船の話などはとても勉強になった。また、樺太などの貴重なお話も聴くことが出来て良かった。現代では社会的弱者には高齢者が取り上げられることが多いが、終戦当時は子どもたちが過酷な状況にさらされており、当たり前だが、終戦からの70年ほどで日本社会の構成は大きく変化していることに気付かされた。炭鉱の仕組みや制度を理解することも重要であるが、そのうえで、閉山などで生じた“ひずみ”や人々のコミュニティ、生活の変化を分析し、これからの社会に応用していくことが求められているのかなと思った。
- ・ 社会学への期待をととても感じて、自分も頑張らないといけないと思った。正直、それ以外のお話は難しくそれぞれがどのように関連していたのかわからなかった。頭がもっと良ければ分かったのだろうか。
- ・ 北海道の石炭の始まりは釧路にあるということを知った。オーストラリアやフランスなどの捕鯨船が食料と石炭を補給するため、開国を迫ったという背景があった。岩崎さんが樺太から北海道の稚内に移ってきたとき、焼け野原のような状態であり、尺別や雄別もまさに何も無い状態だったと聞いて驚いた。お話の中で故郷とは何かという話題が出ていた。岩崎さんには樺太、雄別、尺別という3つの故郷があるが、戦争における敗戦や炭鉱の閉山によって、すべて消えてしまっていた。岩崎さんの故郷についての認識は、三世代にわたってその地域に暮らしている、あるいはその中で交流が図れるということと聞いて、共感する部分があった。炭鉱の居住区、社宅についてのお話では、前日の講演で佐藤さんにお聞きしたように、生活すべてを会社がやってくれるというゆりかごから墓場までという内容であった。社宅では近所づきあいはかなり深いもので、煙突を掃除する際は自分の家だけでなく、隣やそのまた隣も掃除するといったようなことが当たり前だったと聞き、社宅における労働者たちの絆の強さという一面を知ることが出来た。
- ・ これまで故郷について深く考えたことがなかったので80年様々な苦難を乗り越えてきた人の深みを感じました。炭鉱地域社会で生きてきて会社に生活のほとんどを頼っていた話を聞いて改めて持ち家制度の成果の大きさがわかりました。閉山と敗戦が似ているという発想は閉山も戦争も両方経験しているからできる発想だと思いました。閉山も戦争も多くの人々から様々なものを奪ったのだと感じました。

## 解題：「ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭砦閉山」から学ぶこと

笠原良太

### 1. 講演「ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭砦閉山」

本講演は、早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミ 2017 年度フィールドワークにおけるプログラムの一つとして開催された。石炭産業や釧路地域を学びはじめた学生にむけたもので、その内容は、前半は「北海道概論」に相当する。具体的には、捕鯨の歴史から始まり、樺太からの引揚げ、炭鉱での生活、離農や閉山と多岐にわたった。後半では岩崎氏の生活史、とりわけ樺太、炭鉱という「ふたつの故郷の喪失」経験が語られ、単なる概論にとどまらない、密度の濃い講演であった。

第一部では、岩崎氏が小学生のときに経験した敗戦と樺太からの引揚げについて述べられている。すでに 70 年以上も前の出来事だが、小学生時代の鮮明な記憶をもとに、戦争と引揚げの過酷さが語られた。講演の中盤（第二部）では、岩崎氏が青年期までを過ごした雄別炭砦や尺別炭砦での生活史が紹介され、炭鉱生活の特徴が述べられた。岩崎氏は、炭鉱の人びとの絆を強調し、それが各ヤマの友子制度に由来すると説明した。そして終盤（第三部）では、岩崎氏が北海道議会議員時代に見た道内全体の産業再編について述べられ、そうした社会的歪みの影響を最も受けるのは子どもたちであることが指摘された。最後に、自身の経験を振り返りながら、「故郷」や「幸せ」とは何か、その探究を社会学ゼミに所属する私たち学生に課して、講演を終えた。

岩崎氏は、講演の初めと終わりに、「戦争と閉山は同じである」と繰り返し述べている。それは、人びとから故郷を奪う点で「同じ」という意味だろう。このような視点は、岩崎氏に限らず、引揚げ後に炭鉱へ移り、その後炭鉱の閉山に遭遇した、つまり「ふたつの故郷を喪失した」経験をもつ人びとに共通するものと考えられる。彼らは戦時下の樺太でどのような経験をし、そして引揚げたのか。そして炭鉱社会へと移り、炭鉱の閉山を経験したのだろうか。とりわけ、岩崎氏が強調するように、子どもたちは戦争と閉山からどのような影響を受けたのか。以下では、樺太からの引揚げと尺別炭砦の閉山を概観し、樺太引揚者と炭鉱の人びとにとっての「故郷」をみていきたい。

### 2. 第一の故郷、樺太の喪失

戦中から戦後にかけて、樺太から日本への引揚者数は、およそ 40 万人と言われる。彼らは樺太でどのような生活を送り、敗戦後の混乱期にどのようにして引揚げたのだろうか。

樺太は、19 世紀後半以降、日露間で領有権が 5 度にわたり変更した。日本人の移住が本格化したのは、日露戦争後、北緯 50 度以南が日本領となってからである。それまでの樺太は、ロシア帝国の流刑地であり、囚人とその家族およびアイヌなど少数の先住民が居住

する島であった<sup>1</sup>。日露戦争後、南樺太に居住していたロシア人は北樺太（ロシア領）へ移り、樺太は北海道同様、移民型植民地の様相を呈するようになった。

日本人の移住後、樺太開拓は、まず、農業開拓によって進められるが<sup>2</sup>、稲作に不向きな寒冷地であり、初期移住者たちの生活は危機に瀕していた<sup>3</sup>。しかし、1910年代半ばからは豊富な森林資源に目をつけた大手の製紙パルプ工場が進出した<sup>4</sup>。これらの工場にむけた火力発電が必要となり<sup>5</sup>、炭鉱開発<sup>6</sup>および鉄道網の整備が進められた<sup>7</sup>。特に、北部の寒村が1930年代から鉱業都市として発展し、なかでも、樺太工業の工場および大平炭鉱を有する恵須取は、人口3万人を超える樺太最大の都市となった<sup>8</sup>。この結果、製紙・パルプ工業および石炭産業関連の人口が増加し、移住本（出版物）も、農業に特化した内容から他産業を含む総合的な内容へと変化した<sup>9</sup>。

このように、（南）樺太は、移住した日本人による異民族支配の様相が小さい移住型植民地であり、朝鮮や台湾、「満州」とは異なる性質を有した。樺太移民の多くは、東日本地域での農業の失敗や生活に行き詰まった人びとであり<sup>10</sup>、移民第一世代にとって樺太は新天地、すなわち、「第二の故郷」であった。そして、その子どもたち（移民第二世代）にとってはまさに「第一の故郷」であった。岩崎氏は、この移民第二世代にあたる。

しかし、太平洋戦争末期から終戦後まで続いたソ連の侵攻は、彼らから故郷を奪うことになる。1945（昭和20）年8月9日にソ連が侵攻を開始すると、翌日、緊急疎開が決定され<sup>11</sup>、領内全ての子どもと女性たちの疎開が決定した。しかし、実際に疎開できたのは、

<sup>1</sup> 原・天野編（2017: 36）。

<sup>2</sup> 1910年代までは北海道でも農業移民がピークとなり、競合関係にあったため、北海道を上回る特典を付与して誘致した（三木 2012: 109）

<sup>3</sup> 三木（2012: 119）。

<sup>4</sup> 1914（大正3）年の三井合名会社大泊工場（翌年王子製紙に譲渡）を皮切りに、樺太工業や王子製紙、富士製紙などの工場が進出するが、1933（昭和8）年に三大製紙会社合併にともない、ほとんどが王子製紙の工場となった（原・天野編 2017: 120-4）。

<sup>5</sup> 明治から大正期にかけて、内地の製紙工場は大規模河川近くに立地して水力発電に依存していたが、樺太では大規模河川がなかったため、火力発電に依存するほかなかった（原・天野編 2017: 159）。

<sup>6</sup> 「樺太鉱業令」により島内の良質な石炭資源は採取・移輸出を禁止されてきたが（封鎖炭田制度）、製紙工場の進出と家庭用燃料需要の増加にともない、樺太庁は1913（大正2）年に中部の一部である川上炭鉱を、1928（昭和3）年に北部の内川炭鉱（日本人絹パルプ(株)敷香工場開設のため）と南部の内幌炭鉱（三菱油化工業(株)の乾溜工場開設のため）を開封した（原・天野編 2017: 158-65）。

<sup>7</sup> 1920（大正9）年に西海岸の本斗—真岡間約47.3 kmが開業し、本格的に鉄道建設が開始したが（原・天野編 2017: 176）、地理的条件上、恵須取など北部までは延伸しなかった（同: 182）。

<sup>8</sup> そのほか、知取（富士製紙知取工場、登帆炭鉱知取坑）、塔路（島外の樺太炭需要向けの南樺太炭礦鉄道塔路炭鉱（三菱系、1933年開鉱）などの都市が急激に拡大した（原・天野編 2017: 180-5）。

<sup>9</sup> 三木（2012: 121-2）。

<sup>10</sup> 三木（2012: 118）。

<sup>11</sup> 領内13歳以下の子ども、14歳以上の女性、高齢者、病人を対象に、15日間で16万人を疎開させる計画であった。しかし、北部市町村を中心に未実施に終わった地区が多く、豊原市ほか官公吏警察関係の家族の疎開が多かった（竹野 2016: 242）。

出港付近の人びとにとどまり、多くの子どもたちはソ連の侵攻に巻き込まれた。また、8月22日には、大泊港から出港した緊急疎開船、小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三船が、留萌沖で国籍不明の潜水艦によって攻撃され、約1,700人が犠牲となる事件まで起こった（「三船遭難事件」）<sup>12</sup>。

終戦（15日）を過ぎてもソ連軍の侵攻は続き、義勇戦闘隊<sup>13</sup>や大平鉱業所病院看護師の自決<sup>14</sup>、郵便交換手「九人の乙女」の悲劇<sup>15</sup>など、多くの民間人、若者が犠牲となった。そして、終戦から10日後には、ソ連軍が宗谷海峡を封鎖し、疎開は打ち切られた。その後、公式の引揚げが開始する翌年12月まで、およそ30万人がソ連統治下の「サハリン」に残留せざるをえなかった<sup>16</sup>。

一方、緊急疎開打ち切り直後から「密航」による脱出者が増加した。岩崎氏もこの「密航」によって帰還した。岩崎氏が語ったように、「密航」は、自前の漁船がない場合、多大な乗船料（米一俵程度）を支払わなければならない、加えて、ソ連兵に発見されれば、処罰されたり、遭難するリスクを抱えた<sup>17</sup>。そうした危険を冒してでも、公式引揚げ開始までに2万人以上が「密航」によって脱出したとされる<sup>18</sup>。

そして、1946（昭和21）年12月に真岡一函館間で公式引き揚げがようやく開始され、1949（昭和24）年7月までに総勢26万3,875人が引揚げた<sup>19</sup>。樺太引揚者は、樺太での居住年数が長く、なおかつ内地の都市部が空襲等で灰燼に帰していたため、無縁故者の割合が高く、引揚げ後の定着に困難を要した<sup>20</sup>。そのため、樺太引揚者のおよそ7割が北海道にとどまり<sup>21</sup>、礼文島や利尻島、各産炭地に定着したという。当時の北海道での多様な産業（農林水産漁業、製紙業、鉱業など）が引揚者を吸収したのである。一方、親族と生き別れた子どもたちや若年女性をはじめとする抑留者たちは<sup>22</sup>、「サハリン」で困難を強いられた。岩崎氏が指摘するように、戦争による最も大きな被害を受けたのは子どもや若者たちであった。

<sup>12</sup> 北海道新聞社編（1988）。

<sup>13</sup> 原・天野編（2017: 306）。

<sup>14</sup> 畑中（2014）。

<sup>15</sup> 川嶋（1989）。

<sup>16</sup> 原・天野編（2017: 302）。

<sup>17</sup> ソ連兵に発見され脱出に失敗した場合、当初は1ヵ月程度の留置と賦役の後釈放されていたが、徐々に厳罰化され、1946（昭和21）年春以降は島内の刑務所での服役や、シベリア送致された（竹野 2016: 248）。

<sup>18</sup> 他方、急速転換や緊急疎開で家族離散を余儀なくされた人びとの「逆密航」もあった（竹野 2016: 249）。

<sup>19</sup> 竹野（2016: 252-3）の表5-3、北海道民生部保護課「南樺太地区未帰還者の全般的資料」にもとづく。

<sup>20</sup> 竹野（2016: 252）。

<sup>21</sup> 竹野（2016: 260）。

<sup>22</sup> 公式引揚げ前に、ロシア人や朝鮮人と結婚した若年女性（そのうちの多くが「暮らしのため」に結婚）は約1,500人にのぼり、その後40年近く帰国できなかった（TBS・JNN 2017）。

### 3. 第二の故郷、尺別炭砦の喪失

働き口と家を失った引揚者たちにとって、道内の炭砦は魅力的であった。当時、石炭産業は、戦後復興の重要産業であり、傾斜生産方式のもと、米をはじめとする食糧等の特配があった。「炭砦に行けば、仕事と家と米がもらえた」のである。実際、炭砦では、社宅（炭住）や電気・水道・燃料等が保障された。特に、樺太の炭砦で暮らしていた人びとは、道内の炭砦に移る傾向にあった。岩崎氏が移った釧路の尺別炭砦にも、樺太の三菱塔路炭砦などから移った人たちが大勢いたという<sup>23</sup>。

岩崎氏一家は雄別炭砦で生活を始め、その後尺別炭砦へ移った。両炭砦は、ともに三菱系の雄別炭砦鉄道(株)の主要な炭砦であり、赤平の茂尻炭砦と合わせて「雄別三山」と呼ばれていた。なかでも、雄別炭砦は最も大きく、人口は1万人を超えていた。岩崎氏が通っていた当時の雄別小学校児童数は約1,200人にのぼり<sup>24</sup>、管内屈指の「マンモス校」であった。同じく、雄別中学校も1学年5クラスを有する規模の学校であり、その点、岩崎氏が中学2年時に移った尺別は、人口4,000人程度、中学校のクラスも2クラスと、小ぢんまりとした「家族的」な炭砦町であった。

ここで、尺別炭砦について説明しよう。尺別炭砦は、1918（大正7）年に、当時の尺別村（現、釧路市音別町尺別）の山間に開砦された。尺別炭砦の町は、炭砦によって形成された「炭砦城下町」であり、炭砦の発展にともない拡大していった<sup>25</sup>。戦時中、1944（昭和19）年には急速転換にともない休坑となるが、1946（昭和21）年に復興した。この復興は、尺別炭砦従業員とその家族、ならびに社外の組関係、指定商、僧侶などを含めた全山の努力による復興であった<sup>26</sup>。また、共済制度である「友子制度」は、戦後すぐに消滅するが、その文化と人間関係はその後継承された<sup>27</sup>。さらに、尺別では、子どもたちの教育に対して学校、父兄、会社が協同で取り組む「尺炭教育」が展開された。こうした背景のもと、尺別の人びとの結びつきは強く、まさに「一山一家」であった。それは、岩崎氏のように、樺太からの引揚者も包含したものであった。

しかし、1970（昭和45）年2月の企業ぐるみ閉山によって、引揚者は再び「故郷」を喪失する。尺別炭砦は、釧路や帯広から離れた山間にあり、閉山とともに人びとが他出し、高度成長期の大都市圏に吸収されていった<sup>28</sup>。閉山から5ヵ月後、小中学校は閉校し、わずか1年以内に全住民が他出した。雄別炭砦も同様であり、まさに「閉山⇨地域の崩壊」

<sup>23</sup> 尺別炭砦病院の看護師として勤務経験のあるA氏（女性）によれば、塔路炭砦から尺別におよそ20名が移り、その後も定期的に交流があったという（2018年2月21日インタビューより）。

<sup>24</sup> 1947（昭和22）年度の児童数（阿寒町立雄別小学校1970）。

<sup>25</sup> 従業員の増加にともない、炭住の整備はもちろん、学校や郵便局、購買所、商店、病院等が整備されていった。なお、尺別炭砦地区に隣接する尺別原野は、1900（明治33）年の入植以来、開拓が進められた（記念誌編集委員会編2000）。

<sup>26</sup> 2017年7月市橋大明氏（元尺別炭砦中学校教員）インタビューより。

<sup>27</sup> 秋月（2018）。

<sup>28</sup> 労組組合員693名のうち、道外への就職が多く（353人）、主に神奈川（104人）、千葉（83人）、愛知（28人）、東京（22人）へ移動した（尺別炭砦労働組合1970:23）。

であった。子どもたちは、突然の他出・転校、友人との別れ、都市生活への適応等を余儀なくされ、多大な影響を受けた。閉山当時、尺別炭砦中学校の教頭であった松実寛氏は、「非常に多感」で「あまりに人生経験が乏しい」中学生たちが、閉山によって「幅広い、たくさんの深刻な問題を同時に抱え込んだ」<sup>29</sup>と振り返っている（詳細は『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.7 参照のこと）。岩崎氏が指摘するとおり、子どもたちは閉山による歪みを一身に受けたのである。

岩崎氏自身は、すでに 1964（昭和 39）年に尺別を離れており、閉山時には札幌で暮らしていた。尺別にいた姉夫婦も閉山後、釧路に移り、新たな生活を築き始めた。こうして岩崎氏は、遠く離れた地で二度目の故郷喪失を経験したのである。

#### 4. 共有され続ける「故郷」——活発な同郷会活動

以上のように、樺太や尺別炭砦で暮らした人びとは、戦争や閉山という突発的な出来事によって故郷を追われ、異郷の地で新たな生活を送ることになった。そして、岩崎氏のように、引揚げ後、内陸型炭砦に移った人びとは、二度にわたって故郷を喪失することになった。現在、樺太は事実上、ロシアの領有地となり<sup>30</sup>、尺別はすべてが自然に還り、往時を偲ばせるのは復興記念碑のみとなっている。

しかし、樺太引揚者や尺別の人びとは、今日、記憶のなかにある「故郷」を、同郷や同窓の人びとと共有している。引揚げから 70 年、閉山から 50 年が経とうとする現在も、彼らは同郷会や同窓会で集い、故郷に想いを馳せている。樺太引揚者最大の組織である「全国樺太連盟」（1948 年創立）は、現在も全国に 28 支部<sup>31</sup>、1,338 名の会員を擁し<sup>32</sup>、機関紙の発行、各種イベントの開催等をおこなっている。そのほか、協調団体として、同郷会、同窓会が結成されている。また、尺別炭砦で暮らした人びとは、主な他出地である東京や札幌などに「尺別会」を設け、閉山当時中学生だった世代も含めて活発な活動を続けている。尺別炭砦中学校の同期会はさらに活発で、定期的に札幌や釧路などで恩師を囲みながら、青春時代を懐かしんでいる。これは雄別炭砦でも同様である。実際、岩崎氏が所属する雄別炭砦中学校第 6 期同期会では、高橋茂雄氏（第 6 期生、元雄別小学校教員、P 9 写真 2 参照）が中心となって、1980 年から 2018 年 1 月まで、同窓会通信『あく手』が 418 号にわたって発行され、現在でも強固な結びつきがみられる。岩崎氏が指摘するように、炭砦ならではの「友子」、「一山一家」精神を脈々と受け継いでいるのかもしれない。

こうした同郷会活動は、同郷人だけでなく、同郷以外の人びとが樺太や炭砦という「故郷」を知るうえで、重要な役割を果たしている。実際、私たちは、樺太連盟やその他の団

<sup>29</sup> 嶋崎・笠原編（2016: 10-1）。

<sup>30</sup> 日本政府の見解では、ソ連（現ロシア）は、サンフランシスコ平和条約（日本が南樺太および千島列島に関するすべての権利を放棄）に署名していないため、国際法上、領有権を主張できないとしている（外務省 2010）。

<sup>31</sup> 全国樺太連盟（2016）。

<sup>32</sup> 全国樺太連盟（2017）。

体が発行している多くの機関紙（「樺連情報」など）によって、樺太を知ることができる。また、同郷会を通じた学術調査も可能である。実際、産炭地研究会（JAFCOF）は、尺別会を通じて「尺別炭砦で暮らした人びと調査」（2016年～）を実施しており、炭鉱での働き方、生活、文化、学校、移動、記憶など、多分野にわたり展開している。そして、なにより、この調査を通じて多くの人びとと出会い、岩崎氏とも出会えたのである。

このような点からも同郷会の長期的活動が求められるが、近年は、会員の高齢化にともない、存続が危ぶまれる会も増えている<sup>33</sup>。これまでは、故郷を喪失したという共通体験と望郷の念が彼らの結束力を強くし、同郷会活動を活発にしていたが、今後、世代交代による活動の再活発化が求められる。そして、外部の人びととの交流を促進して、彼らのなかにある「故郷」とはいかなるところか、移住前後の生活史も含めて、記録し、継承していく必要がある。

## 5. 氏の講演から学ぶこと

岩崎氏の故郷喪失経験は、半世紀前の出来事であるが、今日の社会状況に通ずる部分が多々ある。氏の講演からまず連想できるのは、東日本大震災と原発事故による「故郷の喪失」であろう。すでに7年経つが、依然として故郷に戻れない人びとが多数いる。子どもたちは、予測できない突然の大きな地震とともに多くの困難な経験、親族の死や避難生活、家族関係の変化、友人との別れ、都市生活への適応等を強いられた。それは今なお続いている<sup>34</sup>。故郷の喪失、子どもたちへの影響という点で、災害も戦争や閉山と同義なのかもしれない。

また、氏が自分自身に問うていた「本当に故郷は必要なのか」、ひいては「幸せとは何か」という問いは、われわれが生きる上で抱え続ける問いであろう。岩崎氏は、その答えを見いださうるのは「社会学」だろうと、期待を込めて私たち学生を鼓舞した。

はたして、社会学を学ぶ私たちに、その答えを導き出せるのだろうか。それは、一朝一夕で成せるものではない。おそらく、各々があらゆる社会的事象に関心を持ち、人びとの経験や人生と真摯に向き合い、記録し、探究し、知見を積み重ねていくことで答えが見えてくるのではないだろうか。その点、釧路を舞台に展開している嶋崎ゼミのフィールドワークは、絶好の機会である。早速、岩崎氏の講演を聴いた学生たちは、関心の幅を広げ、研究に取り組んでいる。2017年度ゼミ報告書『“生きている炭鉱”と釧路研究V』には、「友子制度」、「捕鯨の歴史」、「炭鉱の記憶」、「閉山の子どもたち」など、例年以上に豊富なテーマが並んでいる。こうした成果の蓄積から、氏の問いに対する答えを導き出せるだろう。

「社会学を学ぶことを通して」「みなさんに頑張ってもらいたいと思います」という岩崎氏の言葉を肝に銘じ、今後、研究に邁進したい。新たな関心と想像力を掻き立ててくれた岩崎

<sup>33</sup> 2000年代以降、豊女同窓会や豊原一校同窓会など、すでに解散した会がみられる。

<sup>34</sup> 森健編（2012）、文藝春秋増刊（2016）など。

氏に、改めて感謝申し上げたい。

### 参考文献・資料

阿寒町立雄別小学校，1970，『雄小48年のあゆみ』。

秋月千里，2018，「友子制度からみる炭鉱社会——尺別炭砦における友子制度」『“生きている炭鉱”と釧路研究V』：135-45。

文藝春秋編，2016，『つなみ——5年後の子どもたちの作文集』。

原暉之・天野尚樹編，2017，『樺太四〇年の歴史——四〇万人の故郷』全国樺太連盟。

畑中浩美，2014，『大平炭鉱病院看護婦の悲劇』下北半島研究所。

北海道新聞社編，1988，『慟哭の海——樺太引き揚げ三船遭難の記録』北海道新聞社。

外務省，2010，「日本の領土をめぐる情勢」，外務省ホームページ（2018年3月10日取得，  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hoppo/hoppo\\_keii.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hoppo/hoppo_keii.html)）。

金子俊男，1972，『樺太1945年夏——樺太終戦記録』講談社。

川嶋康男，1989，『「九人の乙女」はなぜ死んだか』恒友出版。

記念誌編集委員会編，2000，『あこがれ』。

三木理史，2012，『移住型植民地樺太の形成』塙書房。

森健編，2012，『つなみ——被災地の子どもたちの作文集 完全版』文藝春秋。

嶋崎尚子・笠原良太編，2016，「尺別炭砦の閉山と子どもたち——元尺別炭砦中学校教頭松実寛氏による講演の記録」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』7。

尺別炭砦労働組合，1970，『労働組合解散記念誌 道標 ——山峡の灯——』

竹野学，2016，「樺太からの日本人引揚げ（1945～1949年）——人口統計にみる」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二，『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究——国際関係と地域の視点から』日本経済評論社：229-70。

TBS・JNN，2017，「JNNドキュメンタリー『2つの祖国を生きて——サハリンの記憶』」（2018年3月12日取得 [http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs\\_newseye3195050.html](http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye3195050.html)）。

全国樺太連盟，2016，「樺連の概要」全国樺太連盟ホームページ（2018年3月14日取得，  
<http://kabaren.org/kabarennogaiyou/>）。

———，2017，「樺連情報」810。

◆  
ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭硯閉山

—岩崎守男氏による講演の記録—

(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.13)

◆  
発行日：2018年4月20日

◆  
編集：笠原良太・嶋崎尚子

発行者：産炭地研究会 (JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>

◆  
本報告書は、2016～2018年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)『第4次石炭政策下での閉山離職者家族のライフコース：釧路炭田史再編にむけた追跡研究』(課題番号・16K04111 研究代表者・嶋崎尚子)による研究成果の一部である。